

## 1. 活動報告

- ・ 活動日程：8/7~8/26
- ・ 場所：コンゴ民主共和国首都キンシャサ

## 2. 活動目的

本活動の概要は、長谷部葉子研究会コンゴ ACADEX 小学校プロジェクトの中で本年度 3月より本格的に始動した、コンゴと日本の人々の協働によるソーシャルトランスフォーメーションの新たな取り組みを生み出すためのプラットフォーム導入とその定着までのモデル構築である。ここでソーシャルトランスフォーメーションの定義を、現地の大学院 UPC ソーシャルトランスフォーメーション学科の院生複数人へのインタビューにより、「地域に必要と思われるもので現在存在していないもの、あるいは仕組みを地域外から取り入れ、地域の暮らしをより良くしていくこと」と編み出すことができ、ここに本活動の独自性がある。またプラットフォームとは、國領（2011）によると「多様な主体が協働する際に、協働を促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組み」と定義されている。

最終的には先進国による一方的な支援、途上国の援助依存という構造の中行われる国際協力の形とは異なり、日本とコンゴの人々で知恵と力を持ち寄り、共に試行錯誤する中から新たな価値を生み出すプラットフォームのモデルを構築し、現地に定着、普及させることが本活動の目的である。

そのプロセスとして今回は以下の活動に取り組み、次年度以降の活動へ繋げていく。

## 3. 活動内容

### ①現地のプロテスタント系大学院 UPC でシンポジウム開催協力

同大学院は、アフリカ初の「ソーシャルトランスフォーメーション学科」が設立された大学院である。ソーシャルトランスフォーメーションとは

「地域に必要と思われるもので現在存在していないもの、あるいは仕組みを地域外から取り入れるのと同時に、地域の人々の意識変容を図りながら地域の暮らしをより良くしていく過程」と同学科の複数の学生や教授からのインタビューから暫定的に定義している。そして同学科にはインフラや教育など様々な分野で社会に変革をもたらそうとする熱意溢れる現地のプロフェッショナルが集う。そこで本プロジェクトの活動を展開するにあたり、同大学院でシンポジウムを開催することで現地のニーズ把握・共通認識の形成に努めることにした。



実際に現地で問題解決に取り組んでいる、もしくは取り組もうとしている院生や教授を集め、3日間のシンポジウムを行った。我々日本人学生や教授が講演し、意見交換をそこで行った。下記に具体的なスケジュールが掲載されている。

以下、シンポジウムで得た考察である。

- ・ 多くの物資を輸入に頼るなど、創造性の欠如に対する問題意識は現地の人々にあることが分かった。しかしそこからの具体的な改善案の模索中ということであった。現地で創造性を研究している NGO「Source Creative」と協力しながらこの問題意識に対して取り組んでいく必要性を実感できた。

・技術などの方法論だけでなく、その技術が生まれた背景や精神性の共有の重要性を共有した。そして両国の精神性を共有するにあたり、日本渡航経験のある現地の方が重要な役割を担っていくということを共有した。

・お金を投資する「支援」ではなく共に活動していく「パートナー」という日本人側の姿勢を共有した。しかし「パートナー」としてコラボレーションするために、現金を多く要求されるなど多くの「壁」があるので、それを乗り越えるための知恵を貸して欲しいという日本人側のスタンスを共有した。

今後も継続的にシンポジウムを開催していくことで、新たなコラボレーションの可能性を模索していきたい。

## ②UPCにおける日本の伝統的井戸掘り技術「上総掘り」のフィールドワーク実施協力

コンゴと日本の人々の協働によるソーシャルトランスフォーメーションのモデルケースとして、上総掘りの導入を行った。具体的には、上総掘り技術伝承研究会にて同技術を研究されている吉田貞之氏と中村和利氏が、渡航時に同大学院に上総掘りの技術継承フィールドワークを提供する際、日本人渡航者と現地の方が円滑にコミュニケーションを取れるように協力していった。今回の上総掘りのフィールドワークでは水問題が現地の深刻な問題であることを実感した。農村部では、水汲み場から片道20分以上かけて女性や子どもが20キロの水タンクを運ぶ。女性や子どもの負担軽減のために上総掘りは現地の方々には非常に好評であり、上総掘り普及のためのプロジェクトを日本人との協働で立ち上げる話が出た。しかし作業に必要な用具の運搬の際、高額な賄賂を要求され現地の警察や運輸省に協力して頂いて用具を取り戻した事。並びに作業時にローテーションを回すやり方などいくつかの日本式の方法が現地に合わずに文化衝突が何度か起きたなど数々の困難が実施の際にあった。こうした困難を乗り越えた成果として、今も現地の大学院生たちが作業を継続して行っている。そのため次回の渡航時には、コンゴと日本の両国の文化を考慮した統合式作業方法の確立や、プロジェクトを立ち上げるための具体的な議論をしていきたい。



## ③現地の国立教員大学 ISP でのシンポジウムの開催準備と運営

慶應義塾大学の教員・学生と現地の国立教員大学院 ISP の教員・学生との関係性継続ができたことを記念し、記念式典である Friendship Day を2日間運営した。今までの渡航では日本人コミュニティだけで固まることの多かった日本人学生が現地の大学生と幅広く交流でき、関係性構築の機会を設けることができたことが成果として挙げられる。具体的には大学の紹介プレゼン、歌を教える文化交流ワークショップやサッカー大会、そぼろ丼食事会など、幅広い内容で両国の大学生と教員同士が交流できた。現地の学生からは「互いの文化についてもっと深く知り合う機会が欲しい」という要望が出たので、次回は互いの国の精神文化やそれを形作ってきた歴史的背景を伝え合い、より深い異文化理解を両国の学生や教員ができるようにしていく予定である。

